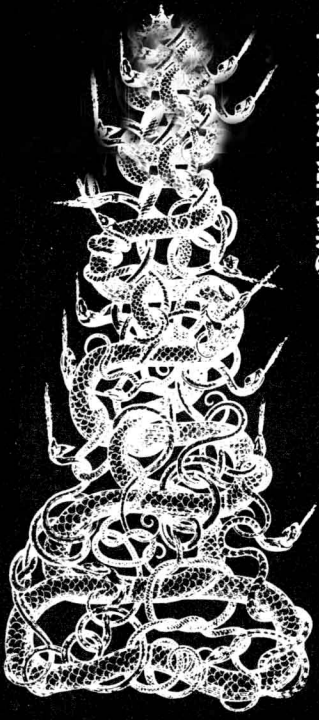


紀田順郎 荒俣宏
責任編集

世界幻想文学大系 55



国書刊行会

世界幻想文学大系 責任編集—紀田順一郎十荒俣宏

第二五巻

小悪魔

昭和五六年二月一〇日印刷 昭和五六年二月一五日初版第一刷発行

著者—アレクセイ・M・レーミゾフ

訳者—安井侑子

発行者—佐藤今朝夫 発行所—株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三一五一八 郵便番号一七〇 電話〇三一九一七—八二八七 振替東京五—六五二〇九

造本—杉浦康平十鈴木一誌 本文挿画—渡辺富士雄

印刷—セイユウ写真印刷株式会社 製本—大口製本印刷株式会社

定価—二、六〇〇円

●—落丁本・乱丁本はおとりかえしませす

安井侑子やすいゆうこ

一九三八年、東京生れ。

モスクワ大学文学部卒業。

専攻、ロシア文学。

主要訳書—

ブルガークコフ

『悪魔とマルガリタ』新潮社、

一九六九年。

アレクサンドル・グリーン

『波の上を駆ける女』晶文社、

一九七二年。

マンデリシュタム

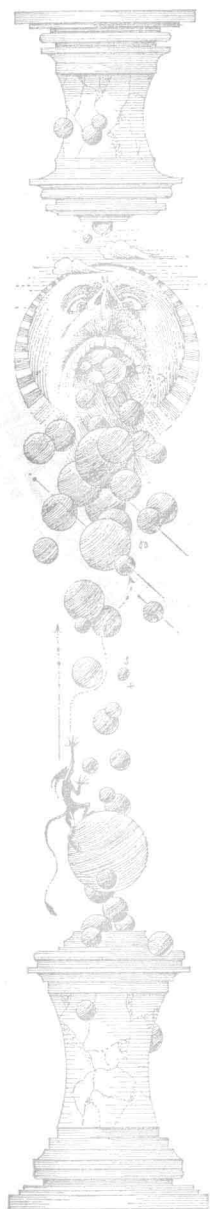
『時のざわめき』中央公論社、

一九七六年。

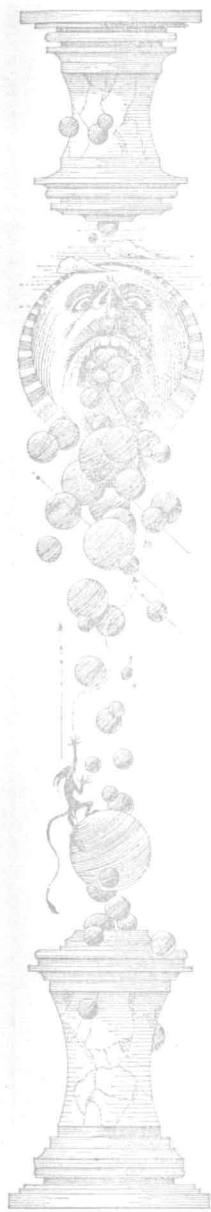
ヴォイノヴィチ『兵士イワン・

チョンキンの華麗なる冒険』

バシフィカ、一九七七年。

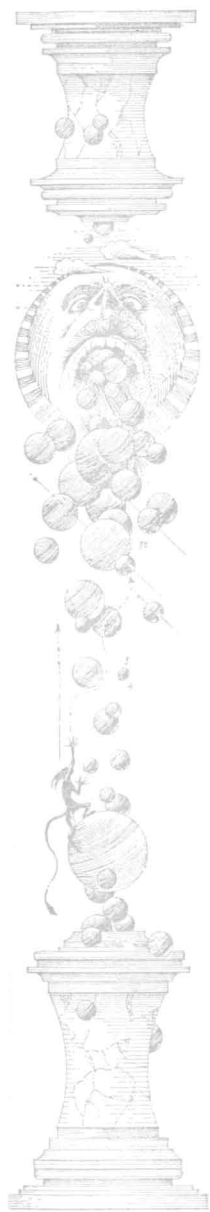


世界幻想文学大系——第二十五卷





小悪魔 A・M・レーミゾフ——安井栞子||訳



目次



ノ——小悪魔 A・M・レーミソフ

ノ——小悪魔

ノ——魔女ザノーファ

ノ——火事

95——小象

129——お陽さまを追って……童話集

131——ナターシャへ

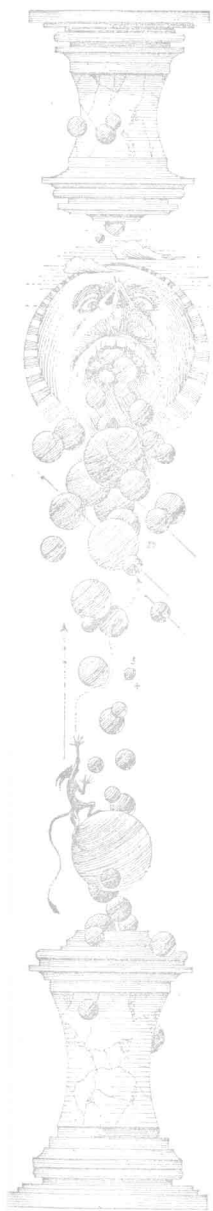
134——春のさくら

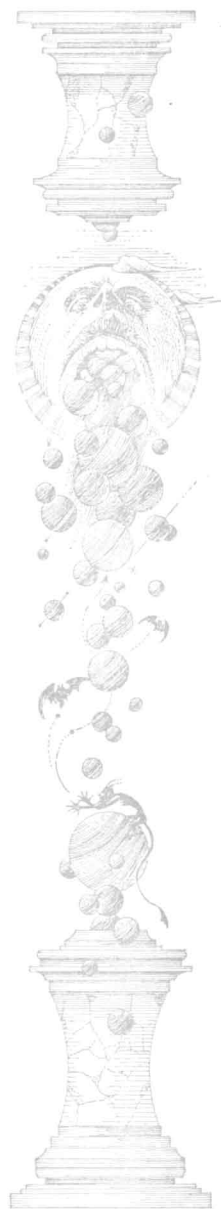
154——美しい夏

174——暗い秋

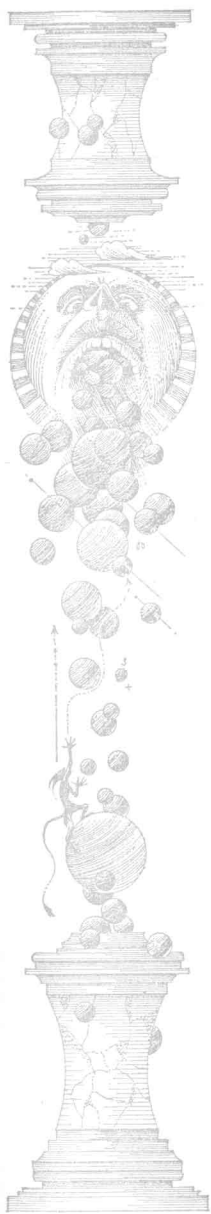
190——厳冬

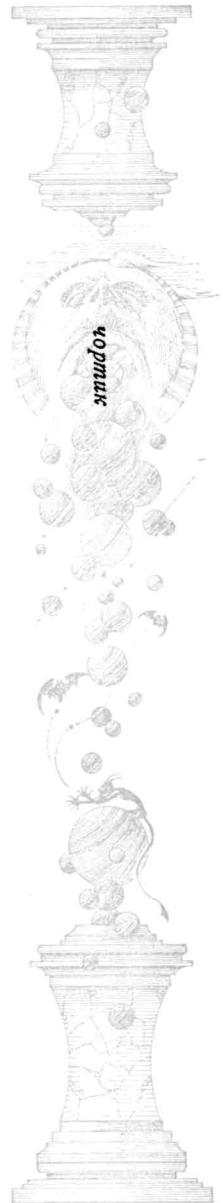
271——夢と現実の境界に——安井侑子





小悪魔





1

ジヴィーリン家は、川つぶちに立っている。古ぼけて、灰色で、樹の皮の剥けた家。どんな犬だって知っている。

階段につづく家の扉は巾が狭く、灰色で、節穴ひとつ、隙間ひとつなく、鍵穴さえもみあたらない。夜など、いくら呼べども聞かえそうにはない。それに誰がいったい夜ふけに扉など叩くというのか？ 泥棒か？ もし泥棒だとすれば、問題にはならぬ、泥棒だったら扉がなくなつて忍びこむはず、だからこそ泥棒ではないか。だが万いち、のっぴきならぬ用事のときは……いや、詮索したってはじまらない——呼鈴はないのだから。

ひところ、扉には貼り紙がぶらさがっていた。《出入りは窓から》

誰かの悪戯か、はたまた、修理かなにかの都合でもあったのだらうか——そういえば確か、あの頃あのあたりにはペンキ職人たちの姿がみかけられた。だがそれで事が片づくわけでなし。まあとにかく、試してごろうじろ！ その窓というやつがいったいどこにあるか。どんなに跳びあがつたつて、届くものじゃない。ただへとへとになって顎をだすのが関の山。側柱か、あるいは街灯に攀じのぼるかしなければ……ところがその側柱が折悪しく歪んでいるのだ。いつだったか荷馬車が通りかかり、馭者がポカんとよそ見していて、側柱を突っかけ、側柱は傾いて歪み、それからというもの曲つたまま立っている。街灯のほうもこれまたてんでお話にならない。もう少し近ければまだしも、いったいどこにあるかというところ——まるで筋違いな川岸のほうなのだ。これでは攀

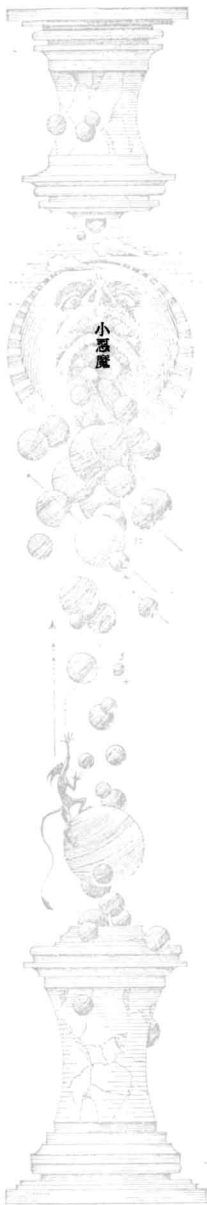
じのぼり、狙いをつけたところで——いやはや攀じのぼるだけ骨折り損、阿呆くさくなる！ つまりは、通りの側からは近寄れぬということだ。

ならば、川岸のほうから柵を跳びこすか？ 柵をこえるには、曲り釘が邪魔もの。うっかりすると指より太い、こんなやつが突きささる、その先の尖がっていること、針のほうはまだましだ。こいつを跳びこすのは、容易なわざではない。

いっそのこと、門から押入れれば……門を押入れれば、すぐ目のまえの中庭には大きな納屋がある。かつてこの納屋は馭者用に使われていたが、いまはただ馬の匂い、馬糞の匂いがただようだけ。それもかすかに匂う程度である。納屋までどうにか辿りついたら、左に折れ、まっすぐ犬小屋まですすむがいい。犬小屋のなかは空っぽ、ベールカという犬が一匹いたが、お陀仏してしまい、吠えるものとしてない。犬小屋のところをまた左に折れていくと、正面に戸口がある。扉は汚れた油布で被われ、滑車がついている。そいつを開けるのは、むろん、簡単だ、なにも手はこんでいない、そして廊下をすすみ、いい加減つまずいたあげく、ついにもう一つ別の扉に突きあたる。ところがこいつがなんとも曲者だ！ いくら辛抱強くこじあげようたって、びくともしない。唾を吐きかけ、立ち去るほか手はない。

よくまあ、隙間をびったり塞ぎこんだものだ！

往来は狭く、人通りも少ない。朝には水売りが、日暮れときには出稼ぎ農夫たちが通りかかるぐらいが関の山。





だが家には人が住んでいる。しかし、なかでいったい何が行われているやら、誰ひとり知る者はない。

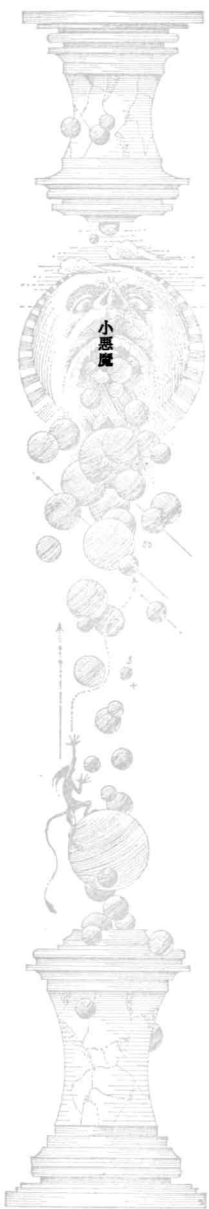
2

ジヴィーリン老人はなかなか人徳があり、瘋癲行者、または白痴で通っていた。隠者暮しをしているものの、ときたま姿をみせることもある。老人は水死人という綽名で呼ばれていた。まだ結婚したての頃、彼は主頭節*1の日に氷の孔に落ちこち、溺れた。総出で彼を探し、釣竿にひっかけて引きあげ、それから腕でかかえあげて水を吐かせた。以来、水死人という綽名を頂戴したというわけだ。それからというものの、ひどい大酒を食うようになった。この魔の刻がやってくるというとき、——たちまち着ているものをのこらず床に脱ぎすて、この世に生れでたときそのままのあられない姿で、往来へ出ていくのだ。雨が降ろうが、雲が降ろうが、あるいはひどい凍てつきや吹雪だろうが、まるで意に介さない。あらゆるものが彼にその瞬間は蝦にみえ、自分はまるで蝦の大王、さながら彼ら蝦一族の母であるかのように思えるのだ。老人は両腕をさしのべ、指を缺のごとくひろげ、捕えようとする。出会うものは誰彼かまわず、引っ捕えるのだ。それからまっしぐらに彼は市場をめざし、まず手はじめに馬に襲いかかる。この四つ足に拳骨の雨を降らせ、鼻面をかきむしり、あげくの果てにへとへとになり、どこかそこいらの厩のわきで急に静まりかえるのだ。そ

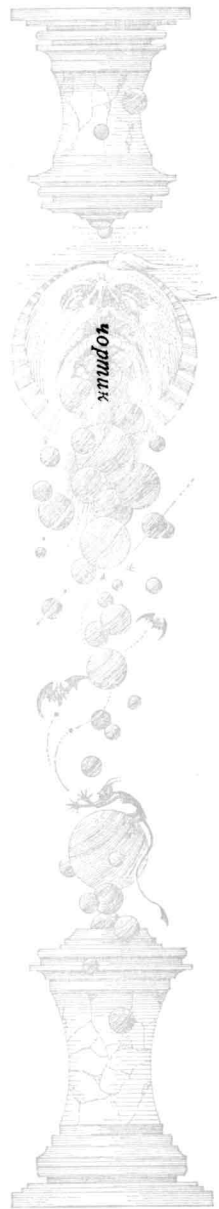
して席の下にまるで死人みたいに身動きもせず横たわり、白目のない両眼を大きく見開き、蝦さながら突きだし、自分も、ゆでた蝦そっくり、身体じゅう真っ赤に染まっている。しかし時がたつと、はっと我にかえり、起きあがり、ぶつぶつ呟いたり、さかんに説教をはじめ。これが聞きものなのだ！ こうなるともう女どもが彼を捕えて離さない。水死人の言うことはすべて、びたりとの中するのだから。一度だつて嘘を言ったためしはない。どうやら、そういう才能があるものとみえる。こうして彼の人徳たるや大したものだった。これほど人に敬われる人物もめずらしいだろう。だが彼は意に留めず、必要とする風でもない。老人が欲していたのは別のものだったのだ。

老婆のアグラフェーナは、さながら尼寺にいるかのごとく、どこへも姿をみせず、家にこもりつきりだった。だが彼女を見たことのあるものは、誰も年寄りとは言わない。せいぜい四十そこそこ、それでも多すぎるくらいで、この年ならまだ年寄りどころか、身のこなしはまだまだ軽しいし、他の女ならさだめし若い娘が羨むような思いきつたことをしてかしてみせるところだ。白い頭布くちかぶを被り、全身透きとおるように白く、身じろぎもせず、まるで骨なし人間か、石女といった有様。口もきかず、微笑みもしない。そしていつまでも同じ姿のまま、年をとるでもなく、かといって若返るでもなし。だが昔は、嫁入りまえは、これであつと驚くよう

• 1ーロジャ旧曆一月六日。



小悪魔



な奇蹟をやつてのけたものだった。とても情の厚い娘で、誰にでも優しい言葉をかけ、慰めてやり、どこからそんな言葉を思いつくのやら、胸がぎゅっと締めつけられ、その言葉は魂の奥底まで入りこみ、いかなる地獄の炎熱をも鎮めてしまうのだ。彼女の物知りには、どんな年寄りだって敵わないほどだった。よく誰かにいろいろ尋ねかけては、難しいときには自分から忠告したりすることもあったが、思わず耳を傾けたくなるのだ。瞳は青く、髪の毛は亜麻色。そこいらの凡人はおろか、修道僧だって彼女には抗えなかったにちがいない。それがどうしたわけか——水死人のイワンに彼女がぞっこん惚れてしまったのだ。ところがイワンのほうはさっぱり知らん顔、いやもつと悪いことに、なんで彼女が嫌いなのか自分でもわからぬという始末。そこで事件が起つたというわけである。彼女はイワンの心をまんまと物にし、思いを遂げた、それも自分の力ではなかったのだ。

事の次第はこうだった。もうずっと以前から、アグラフェーナは良からぬ企みを胸に抱いた——魔力で相手を惚れさせてやろうと。ただ復活祭の来るのを待ちうけていた。

復活祭の第一目のミサが終つたあと、神父が聖水をもつてすすみでたとき、彼女は聖水がいちばん最初に滴つたピラミッド型凝乳菓子*1に目をつけ、その片をむしりとると、こっそり懐ろに隠した。同じように、聖水がいちばん最初に滴つた発酵パンからも片をむしりとして隠した。発酵パンと凝乳菓子を布きれに包み、胸にさげ、そうやって新月になるまで肌につけておいた。新月が空にのぼると、彼女は人気がない場所に出かけ、月に向つて立ち、胸から金の十字架を月に向けてはざし、呪文をとなえはじめ

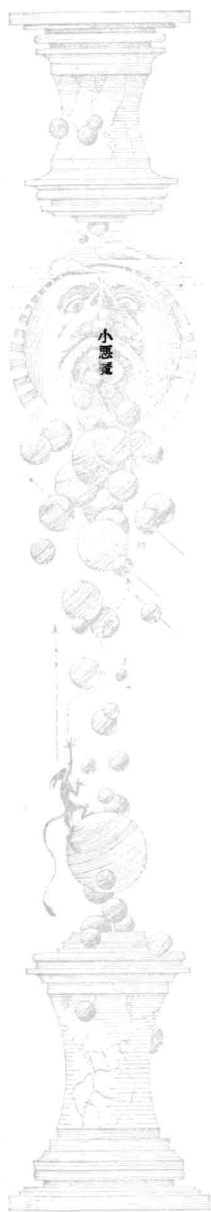
た——魔力で惚れさせる呪いをかけたのである。

「新月はすべてを見、新月はすべてを知っている、誰と誰が口づけをかわすかを見、知っている。そして彼女、アグラフェーナは、イワンと口づけする。そのまま永遠に、口づけし、睦みあう、雌鳩と雄鳩のように！ 彼女はろばの背にまたがり、まむしの鞭を振って、発酵パンと凝乳菓子を手に新月のほうへ近づく。すればイワンはもはや顔をそむけはしない。彼女に冷いことを言わない。そのまま永遠に、冷い言葉ではなく、いつも愛しい言葉をかけますように」

アグラフェーナは胸から布きれをはずし、発酵パンと凝乳菓子を取りだして食べ、小さな片だけを残した。何か口実をつくってイワンの家に立ちより、こっそり知られぬうちにその片を紅茶のなかに振りまいた。イワンが紅茶を飲み干すのを待って、家に帰った。

イワンは突然気が触れた。もう彼女なしでは生きられない。ところが彼女のほうも愕然とした。どうも様子がおかしい、もう以前のように暮せない、しきりとどこかへ吸いよせられ、血が凍りつくようなとてつもない考えが頭に浮んでくる。それがすべてこっそり、まるでひとりで、あたかも冗談のようになのだ。身内にはこの世のものならぬ力を感じ、どんな信じがたい願いごとでも、

* 1—復活祭に用いる。





たちまち叶えられてしまう。彼女はもはや願いごとをするのを恐れ、考えるのが恐しくなった……ふたたび、十字架をとりだすと、首にかけ、精進にこれつとめ、何もかもすべて、本にあるとおりに励み、つとめた。そしておとなしくなった。まるで殴り殺されたみたい、まるで悪魔に首を絞められたみたいに。悪魔は彼女に愛想をつかし、永久に立ち去った。おとなしく、黙りこくり、たとえ東の間であれ喜びを知らず、微笑すら知らず、この世に暮すよう捨てていったのだ。こうして彼女は安らかに、ひっそりと生きていた。すべてはどこへ消え失せたのか？ 自分でもわからない。そもそも何が在ったのか？ それすら覚えていない。まるで生まれたときからこんな女だったように、生れながらに喜びを知らず、楽しみも知らず、一度も微笑んだことがないかのよう。ただ祈っては溜息をつき、祈っては吐息をつく。何を祈っているのか？ 罪深さのことを。だがいったいどんな罪深さのことを？

3

ジヴィーリン夫婦には、子供が続きつぎ生れた。そして死んでいった。元気な赤子が生れ、一年ぐらいたち、そろそろ歩きはじめ、喋りはじめるころ、突然ぼっくり死んでしまう、——神さまのもとに召されてしまうのだった。結局生き残ったのは二人だけ——男の子二人であった。